

空



2011・8

SORA 38号

水中り
柴田 佐知子

国難のたびに英雄青あらし

花ミモザ閉づることなき地獄門

紫陽花や人住みて家若がへる

故郷を夜ごと威して牛蛙

伽羅路や母の話に井戸のこと

次の田へもんどり打ちし濁り鮒

夕暮の青田にしるき風の道

何もなき道に雀や朝曇り

目覚めては一と日端居のごとき父

でで虫の一樹万の葉動かざる



鳩の巢や雨はやさしきまま上る
立葵園児の歌の揃ひけり
純潔の男老いたり燕子花
萍の下より夜の来りけり
山蟻の鋼のごとし座禅石
本尊へ素足の女近づけり
船虫や朝市はもうたたまれて
草笛の鳴らずじまひや海の紺
高くして日傘に男招きけり
箱庭の橋を渡つて逢ひにゆく
成りゆきに任せてをれば水中り
真夜中やこの世の端に水中花

静寂

宮井知英

田植

秋千晴

青郁子や昔男の子は坊主刈

軍鶏の背筋伸ばして夏に入る

夕菅や眼を閉ぢて抱かれたる

鯉幟命あるごと軒を出る

梅雨晴や遊びに覗く遠眼鏡

梅雨出水車道に泥鯰跳ねてをり

螢や橋の真中で別れけり

犬も居て家族総出の田植かな

翅乾くまでの静寂蝉生るる

棚田植う耕の尻の見ゆるのみ

臍の緒は樟脳まみれ土用干

猫だけがひまよひまよと田植かな

逢ひたき日罪ある如く髪洗ふ

眼まで泥まみれなる溜り鮎

鶏の首で息する日の盛り

梅ちぎる向かひ合はせに脚立たて

鏡

高倉恵美子

機長の声

鳳

蛮華

田を植うる準備の半ば入院す

「旅人の木」の下に立ち夏始

老人の爪の硬さや梅雨の冷え

でこぼこの道なつかしや桐の花

外泊を許されし日のうす衣

葉さやぎを産声と聞く楠若葉

連山の浮き立つてゐる代田かな

古文書の伝はる家の夏木立

病室の身の上話冷房裡

五月富士見下ろすべしと機長の声

福祉バス青田の中を通りけり

なよ竹の梅雨の撓みとなりにけり

坊守の同郷といふ立葵

読点の糞を残してかたつむり

鏡見ること疎くて大暑かな

吊忍老いて母似と言はれけり

雲の峰

小林 朱夏

拳骨

吉村 摂護

返事なきことが答か螢の夜

動くとも見えぬ巨船や赤とんぼ

絵馬に押す力士の手形雲の峰

明易し夢に出る兄みな子供

潜る時真顔となりし茅の輪かな

螢狩満員バスに押し込まれ

昼も夜もよく寝る赤子遠蛙

一年をぎゆつと押し詰め山笠走る

西日ごと洗濯物を取り込みし

空蟬が己と対峙する鏡

囲まれて休んでゐたる金魚売

原子炉の溶けて流るる炎天下

手花火の腕真つ直ぐに伸ばしけり

拳骨を握り締めたる敗戦日

母の手の届く高さに柿を干す

大西日玄界灘を黙らする

方丈

安武 晨子

神話

あさなが捷

方丈は鴨居に法衣風かほる

削り節ふうはり出来て青葉かな

寺の児のお辞儀上手よ梅は実に

駐車場に鈴なりの新玉葱

山の子は会へば手を振り遍路みち

泣きさうでおまけにもらふ金魚かな

一枚の代田に映るしるべ石

大空より滝は一途に落ちて来し

溪水の音にも震へ合歓咲けり

八月や荒縄で吊る軍鶏の足

杣小屋は梅雨茸のほか人を見ず

扇風機子ども疲れるまで遊ぶ

十薬の干され杣が家がらんどろ

西安の煉瓦塀より柘榴の実

山の端にのこる西日の仮借なし

国生みの神話はむごし夏の月

猫車苑実耶棚田長憲一

豆腐屋は昼でおしまひ燕来る

あかときの月のせてゐる櫻かな

紅の薔薇は王妃の名を貰ひ

杖をつく二人母校の櫻見る

解体の重機の音や半夏生

お忘れもの札所にさがる遍路笠

青蔦や土産屋を風通り抜け

牛の背に番号つけて阿蘇の春

過去帳に母の名加へ土用風

もう番号つきし子牛や夏薊

まつ白く雲の湧き継ぐ夏野かな

明日は田を植うる爪なり染めにけり

溝浚へ巧みに使ふ猫車

屋根よりも高き棚田を植ゑにけり

先客は端に待ちゐる夏料理

田を植ゑて棚田は青き天に入る

空作品抄 — 柴田佐知子抽出

袋角思ひつめたる色をして

高倉和子

大漁旗下ろす骨まで日焼して

中田みなみ

病葉の緋を巻き込んで鯉の渦

荒井千佐代

さざめいて網戸をすける越の海

服部早苗

壁泉の止まり退庁時刻です

柴田志津子

鯉のぼり道を挟みて話しけり

だいじみどり

祀るもの多き山国粽結ふ

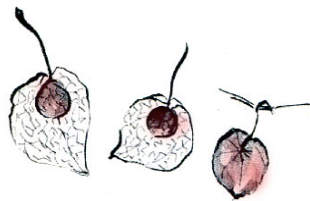
松田明子

船虫の総身に耳あるごとし

大地真理

臍の緒は樟脳まみれ土用干

宮井知英



猫だけがひまよひまよと田植かな

鏡見ること疎くて大暑かな

古文書の伝はる家の夏木立

絵馬に押す力士の手形雲の峰

大西日玄界灘を黙らす

山の子は会へば手を振り遍路みち

八月や荒縄で吊る軍鶏の足

紅の薔薇は王妃の名を貰ひ

田を植ゑて棚田は青き天に入る

梅雨冷や恐竜展は関節展

山国の小さきみ空や鯉幟

みじろぎもせず眠れる大暑かな

形代や沈みし男浮く女

秋 千晴

高倉恵美子

鳳 蛮華

小林朱夏

吉村摂護

安武農子

あさなが捷

苑 実耶

長 憲一

田岡千章

松田明子

矢野百合子

亀井紀子

なめくぢの好むものみなぬめりゆく

ばさと断つ思ひもありぬ更衣

水面にも大きくなりて樟若葉

大巖へ炎のごとく灌の落つ

群ることなく白鷺はナルシスト

ただ若きことをとむらふ大石忌

ブギウギウギワクワクワクと毛虫逃ぐ

夫の香の疾うにうすれし夏帽子

立葵気の強い子は嫌はれて

ふるさとに苗代蛙の一夜かな

胡椒水呑んで鬪鶏勢ひ立つ

頭を入れてすぐに胴入る蚊帳かな

敗け力士ふはりと浴衣肩に掛け

栗原京子

宮井知英

秋 千晴

織田高暢

小林朱夏

岸 千手

原 友子

安武晨子

あさなが捷

柴田志津子

吉村摂護

吉田 菡

古川夏子



正しきこと眩きながら水を打つ

曇天のいよいよ低き田を植うる

褒められし髪も切りたき炎暑かな

花びらの反りを尽くして終の薔薇

いつの世も姉が叱られ茄子の花

子には子の言ひ分ありて姫女苑

餓鬼岳は崖岳とかや滴れり

羽抜鶏駆込寺を素通りす

病床の汗ばみゆける掌を握り

みのむしとなりて刃を待つ手術台

滴りに聖地の如く跪く

風鈴を吊るに風道探しをり

十葉や母に告げたきこといくつも

大地真理

石川叔子

清水量子

鳳 蛮華

山内 碧

仲里奈央

中原俊之

池田華甲

小川 涼

乾 有杏

白水良子

山田正子

野畑小百合



蟻の列幹線道路かもしれぬ

まん中に墓こんもりと青田風

蟻浴びの鴉つやある梅雨晴間

総身の煤けてきたる蕨狩

うららかや親子で戻す子安石

水貝の秘密めきたるカウンター

癒されてゆつくり出づる木下闇

叱られて子が黙りこむかたつむり

故郷の晩秋きりつと立ちてをり

熟年婚出来さうな髪洗ひけり

裏庭の思ひ出ばかり花柘榴

朝顔や介護士に手を差し出され

涼しくて日がな一日庭造り

田代貞枝

苑実耶

青木朋子

長節子

ふじの茜

今井春生

遠山のり子

片田きく

星原悦子

岡田弘美

川崎よしみ

神谷耕輔

内藤玲二